

2018年2月16日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 徐 梓競 学生番号 4D502

〈論文題名〉 日本語「～ておく」の用法について
—全体構造及び意味構造を中心に—

〈審査委員〉

主査 外国語学部教授 石川 守

副査 外国語学部教授 木村 政康

副査 外国語学部教授 小林 孝郎

I. 論文の主旨

日本語教育の初級で導入される重要な基本文型の一つである「～ておく」は、一見単純そうに思われるその印象から教育の現場では、「準備」とのみ簡単に教えられてきた。最近よく使用されている教科書 16 冊を見ても、13 冊が「準備」という用法だけを挙げている。残りの 3 冊は、「準備」と「放置」という二つの用法が提示されている。ただ。この「準備」と「放置」という用法は、全くかけ離れており、どのような関連性があるのか、説明に窮することが多い。さらに、先行研究を見ていくと、実に多様で複雑な用法を持った文型であることがわかる。この一見単純そうに見える「～ておく」の複雑な用法を明らかにし、その全体構造を明らかにしようとするのがこの論文の主旨である。

II. 論文の構成

論文の構成は、以下のようになっている。

| | | |
|-------|---------------------------|----|
| 第一章 | はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 6 |
| 1.1 | 研究背景と目的 | |
| 1.2 | 研究方法 | |
| 第二章 | 「～ておく」の用法について・・・・・・・・・・ | 9 |
| 1 | 辞書・参考書・教科書における用法分類 | |
| 1.1 | 辞書における用法分類・・・・・・・・・・ | 10 |
| 1.1.1 | 『新明解国語辞典 第七版』 | |
| 1.1.2 | 『岩波国語辞典 第七版』 | |
| 1.1.3 | 『明鏡国語辞典 第二版』 | |
| 1.1.4 | 『大辞林 第三版』 | |
| 1.2 | 文法辞典における用法分類・・・・・・・・・・ | 12 |
| 1.2.1 | 小泉保(1989)『日本語基本動詞用法辞典』 | |
| 1.2.2 | 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』 | |
| 1.2.3 | 山口明穂(2001)『日本語文法大辞典』 | |
| 1.2.4 | 泉原省二(2007)『日本語類義表現使い分け辞典』 | |
| 1.2.5 | 市川保子など(2010)『日本語誤用辞典』 | |

| | | |
|---------|--|----|
| 1.2.6 | グループ・ジャマシイ (2014)『日本語文型辞典』 | |
| 1.3 | 参考書における用法分類 | 16 |
| 1.3.1 | 庵功雄など(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 | |
| 1.3.2 | 市川保子(2005)『初級日本語文法と教え方のポイント』 | |
| 1.3.3 | 佐治圭三など(2005)『日本語教師養成シリーズ 4 文法, 語彙, 日本語史』 | |
| 1.3.4 | 小島剛一(2012)『再構築した日本語文法』 | |
| 1.4 | 教科書における用法分類 | 18 |
| 1.5 | 辞書・参考書・教科書における用法分類のまとめ | |
| 2 | 先行研究における「～ておく」の用法について | 21 |
| 2.1 | 高橋太郎 (1969) の先行研究 | 21 |
| 2.2 | 森田良行(1971)の先行研究 | 30 |
| 2.3 | 吉川武時(1976)の先行研究 | 31 |
| 2.4 | 長野ゆり(1995)の先行研究 | 38 |
| 2.5 | 谷口秀治(1999)の先行研究Ⅰ | 42 |
| 2.6 | 谷口秀治(2000)の先行研究Ⅱ | 46 |
| 2.7 | 山本裕子(2005)の先行研究 | 50 |
| 2.8 | 先行研究における用法分類のまとめ | 53 |
| 第三章 | 「～ておく」の用法の分類と分析 | 55 |
| 3 | 「～ておく」の用法の分類 | |
| 3.1 | 「～ておく」の各用法の分析と考察 | |
| 3.1.1 | 「準備」 | |
| 3.1.1.1 | 「準備」の用法 | 56 |
| 3.1.1.2 | 「知識・情報の獲得・提示」の用法 | 61 |
| 3.1.2 | 「予防」 | 66 |

| | | |
|---------|--|-----|
| 3.1.2.1 | 谷口（1999）の「用心・警告」の用法 | |
| 3.1.2.2 | 吉川（1976）の「特例」 | |
| 3.1.2.3 | 「予防」の用法 | 67 |
| 3.1.3 | 「期限内対策」 | 80 |
| 3.1.3.1 | 谷口（1999）「自己納得」、（2000）「心理的充足行為を表す場合」の用法 | |
| 3.1.3.2 | 山本（2005）の「心理的準備」の用法 | |
| 3.1.3.3 | 「期限内対策」の用法 | 81 |
| 3.1.3.4 | 「後悔」の用法：「～ておけばよかった」 | 87 |
| 3.1.4 | 「事後処置（事後対策）」 | 90 |
| 3.1.4.1 | 谷口（2000）の「事後処置」の用法 | |
| 3.1.4.2 | 山本（2005）の「事態の収拾を図ること」の用法 | |
| 3.1.4.3 | 「事後処置」に関する筆者の定義：「事後対策」の用法 | 92 |
| 3.1.5 | 「現状対策」 | 95 |
| 3.1.5.1 | 「現状対策」の用法 | 95 |
| 3.1.5.2 | 谷口（2000）の「結語」の用法 | |
| 3.1.5.3 | 山本（2005）の「終結の宣言」の用法 | |
| 3.1.5.4 | 「一時的処置」の用法 | 99 |
| 3.1.6 | 「状態の継続、維持」 | 104 |
| 3.1.6.1 | 先行研究 | |
| 3.1.6.2 | 「単なる状態の継続、維持」の用法 | 105 |
| 3.1.6.3 | 「理由（目的）がある現状の維持」の用法 | 107 |
| 3.1.6.4 | 「保存」の用法 | 109 |
| 3.1.6.5 | 「保管」の用法 | 111 |
| 3.1.6.6 | 「放置」の用法 | 113 |
| 3.1.7 | 「～ておく」の各用法の分析のまとめ | 115 |

| | |
|----------------------------|-----|
| 第四章 「～ておく」の全体構造及び意味構造について | 116 |
| 4.1 「～ておく」の全体構造 | 117 |
| 4.1.1 「事前対策」、「事後対策」、「現状対策」 | 119 |
| 4.1.1.1 「事前対策」 | |
| 4.1.1.2 「事後対策」 | |
| 4.1.1.3 「現状対策」 | |
| 4.1.2 「状態の継続、維持」 | 121 |
| 4.1.3 「～ておく」の全体構造のまとめ | 122 |
| 4.2 「～ておく」の意味構造 | 124 |
| 4.2.1 「～ておく」の基本要素 | 124 |
| 4.2.2 各用法と基本要素 | 125 |
| 4.2.3 各用法と基本要素の前景化と背景化の関係 | 132 |
| 第五章 結論と将来の課題 | 139 |
| 5.1 結論 | |
| 5.2 将来の課題 | |
| 参考文献 | 156 |
| 参考用例 | 160 |
| 謝辞 | |

Ⅲ．本論文の概要

第一章「はじめに」

この章では、研究背景と目的、研究方法について論じている。

第二章 「～ておく」の用法について

第二章では、辞書・参考書・教科書、及び、先行研究における用法分類を詳細に行っている。辞書における用法分類については、現在よく使われている辞書の中から、『新明解国語辞典 第七版』、『岩波国語辞典 第七版』、『明鏡国語辞典 第二版』、『大辞林 第三版』の4冊を選び、まとめている。また、文法関係の辞典としては、『日本語基本動詞用法辞典』、『基礎日本語辞典』、『日本語文法大辞典』、『日本語類義表現使い分け辞典』、『日本語誤用辞典』、『日本語文型辞典』の6冊を選び、「～ておく」の用法をまとめている。

参考書としては、『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、『初級日本語文法と教え方のポイント』、『再構築した日本語文法』、『日本語教師養成シリーズ 4 文法, 語彙, 日本語史』の4冊を選び、まとめている。教科書としては、『みんなの日本語』、『はじめよう日本語』、『げんき』、『大地』、『できる日本語』、『テーマで学ぶ基礎日本語』、『文化初級日本語』、『新文化初級日本語』、『初級日本語』、『日本語文型ドレーニング』、『わくわく文法リスニング 99』、『日本語初歩』、『語学留学生のための日本語』『ひらけ日本語』、『Situational functional Japanese』計16冊を取り上げている。

以上の辞書・参考書・教科書の調査分析から、「～ておく」の用法として、次の四つの用法にまとめている。

用法①「準備」、「前もってする」、「事態の起こる前に現状を変化させ、積極的に処理しようとする」

例：行く前に相手に電話しておく。

用法②「一時的処置」「当座の処置としてある動作を行う意を表す」、「さし当たってあることをする」

例：もう締め切り過ぎているが一応あずかるだけあずかっておく。

用法③「放置」、「放任」「その状態をそのまま続ける」、「動作や状態をそのまま続けさせる」

例：故障した自転車をほうって一・いたらさびついてしまった

用法④「その状態を認めて、そのままにする」、「現在の状況を、積極的に維持しようとする」……

例：私のことはほっておいて下さい

2の「先行研究における『～ておく』の用法について」では、高橋太郎(1969)、森田良行(1971)、吉川武時(1976)、長野ゆり(1995)、谷口秀治(1999)、谷口秀治(2000)、山本裕子(2005)を取り上げている。これらの先行研究の分類は、辞書や参考書等の分類に比べ、

より複雑で、多岐にわたっている。これら进行分析し、その結果をまとめ、次のようにまとめている。

先行研究における用法分類のまとめ

用法①「対象の位置を変化させ、その結果の状態を持続させることをあらわす」

例：わたしの家では、見かねて、このあいだ、「ごみをすてないでください。」と、立てふだを立てておきました。

用法②「対象を変化させて、その結果の状態を持続させることをあらわす」

例：「加藤さんは奥さんに鍵をあずけておいたんです」

用法③「放置」、「放任」

例：「ほうっておけばいいんだよ！」

用法④ ある時までに対象に変化を与えることをあらわす。

例：議題を予告し、資料があれば配っておく。

用法⑤「準備」

例：アメリカに行く前に英語を学んでおく。

用法⑥「期限内の完了」

例：検査前日7時までに晩御飯を食べておいてください。

用法⑦「用心・警告」

例：一言いっておくが、二度と失敗は許さんぞ。

用法⑧「仮初の行為」

例：まあ、一応、考えておきましょう。

用法⑨「聞き手への配慮」

例：いらっしゃい、お安くしておきますよ。

用法⑩「自己納得」、「心理的充足行為を表す」、「心理的準備」

例：元気なうちに、いろんな国を旅行しておきたいんだ。

用法⑪「終結的宣言」、「結語」

例：最後に、以上論じてきたような観点から、「ハ」と「ガ」の機能をここでもめておこう。

第三章『～ておく』の用法の分類と分析

第三章では、第二章でまとめた辞書・参考書・教科書・先行研究の用法の分類の問題点进行分析し、さらに、孫逸珊氏の作成した『動詞一覧表』のすべての動詞を取り上げ、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び、インターネットなど、さらに、様々な印刷媒体から随時収集した用例を丹念に収集している。これら第二章で得られた用法を整理し、新たに、1.「準備」、2.「知識・情報の獲得・提示」、3.「予防」、4.「期限内対策」、5.「事後対策」、6.「現状対策」、7.「一時的処置」、8.「単なる状態の継続、維持」、9.「目的（理由）があ

る現状の維持」、10.「保存」、11.「保管」、12.「放置」、その他、後悔（～おけばよかった）の12種に分類している。この用例うち、2.「知識・情報の獲得・提示」、3.「予防」、4.「期限内対策」、8.「単なる状態の継続、維持」、10.「保存」、11.「保管」、その他、後悔（～おけばよかった）の7用法は、分析の結果、筆者が本研究で新たに提示した用法である。これらの分類に関して、次のようにまとめている。

1の「準備」に関しては、この用法がすべての辞書・参考書・教科書・先行研究で取り上げられていることから、これを「～ておく」の基本的用法と考え、分析を行っている。その結果、この用例に共通するものとして、将来あることを実現する、あるいは、よりよく遂行するためにという「目的（理由）」があり、その「目的（理由）」のために、前もって何らかの対策をとる、そして、その対策行為の結果を「継続」、あるいは「維持」させるということであるとしている。このことから、「準備」の用法は、①「目的（理由）」、②「その対策としての行為」、③「行為の結果の継続、維持」という三つの要素から構成されているものと結論づけている。

さらに、「準備」の②の対策の用法を分析し、将来あることを実現させる、あるいは、よりよく遂行するために、事前に何らかの対策をとるということから、「事前対策」としている。

2の「知識・情報の獲得・提示」に関しては、数多くの用例がある。それらの分析から、具体的な目的は明示されていないが、その背景には、いつか役に立つとか、あるいは、将来自分の人生を豊かにしてくれるかもしれないとか、知っていたほうが良いといった漠然とした「目的（理由）」が存在し、そのための有益な「知識・情報の獲得・提示」という「対策としての行為」とその「知識・情報の蓄積」という三つの要素から成り立っていると考え、「知識・情報の獲得・提示」の用法と名づけている。これも、将来役に立つ知識・情報の獲得・提示ということで、「準備」と同様に、一種の「事前対策」とであると結論づけている。

3の「予防」の用法に関しては、用例の分析から、将来あることを実現させる、あるいは、よりよく遂行するために、事前に何らかの対策をとるという、あることの実現を目的とした「準備」の用法と異なり、将来予想される、あるいは、起こるかもしれない悪い事態が起こらないように、すなわち、そのような事態が起こることを防ぐために、あるいは回避するために、前もって何らかの対策をとるということであるとしている。この意味で新たに「予防」という一項を立てている。

また、「予防」の用法は、将来悪い事態が起こらないように、すなわち、そのような事態が起こることを防ぐために、あるいは回避するために、前もって何らかの対策をとるということであり、これも、「準備」の用法と同様に、一種の「事前対策」とであるとしている。

4 の「期限内対策」の用法は、先行研究では、谷口（1999）「自己納得」、（2000）「心理的充足行為を表す場合」、山本（2005）の「心理的準備」などを指すものであるが、これらの先行研究で提示されている用例の分析から、将来できなくなる時期が来ると考え、できる期限内に、事前に何らかの対策をとるということであると考え、先行研究とは全く異なる「期限内対策」という一項を新たに立てている。これは、独創的な成果と評価できる。

この「期限内対策」の用法は、将来できなくなるという時期が来ると考え、できる期限内、事前に何らかの対策をとるということであり、つまり、これも、「準備」と「予防」と同様に、一種の「事前対策」であると考えている。

5 の「事後対策」の用法は、用例の分析から、既に生じた問題に対して、事前ではなく、事後に何らかの対策をとるということであると考え、「事後対策」の用法と名付けている。

6 の「現状対策」の用法は、用例の分析から既に生じている問題に対処するために、事後にその解決策として、何らかの対策をとるという「事後対策」と異なり、今現在問題になっていることに対して、今何らかの対策をとるという用法である。問題と対策が同時の関係になる。

7 の「一時的処置」の用法は、後で本格的に処置するという目的が存在するが、とりあえず今は、現在ある問題に対して暫定的に何らかの対策をとるという「一時的処置」の用法である。

また、今現在ある問題に対して何らかの対策をとるということに焦点があるため、この「一時的処置」は、「現状対策」の一種であると考えられると述べている。

8 の「単なる状態の継続、維持」の用法は、単純な状態の継続、維持を表すという用法である。この用法には、現在、あるいは、将来の問題を解決するためとか、あるいは、あることを実現させるといった意味は存在せず、単にある状態を継続、維持させるということにのみ焦点がある。

9 の「目的（理由）がある現状の維持」の用法は、8 の「単なる状態の継続、維持」の用法とは異なり、何らかの目的（理由）があり、そのために積極的に現在の状態を維持するものである。

10 の「保存」の用法は、ある物に対して、その物が悪い状態にならないように、すなわち傷まないように、または、消失しないように、何らかの対策を講じて、その結果生じた状態を保ち続けるということである。

11の「保管」の用法は、ある物に対して、その物が紛失したりしないように、その物がある場所に移動させ、その結果生じた状態を保ち続けるということである。

12の「放置」の用法は、本来、何らの対策を講じなければいけないのに、その対策を講じずに何もしないで、そのままの状態を継続するというものである。

その他、「後悔（～おけばよかった）」という用法は中上級でよく取り扱われる文型であるが、「～ておく」と「～ば よかった」とから複合的に構成された文型である分析し。この「～おけばよかった」の意味は、期限内対策を怠ったために生じたことに対する「後悔」の念を表す用法である。この用法は、「～ておく」の「期限内対策」の用法と「～ば よかった」という、あることをしなかったために生じた「後悔」の用法が合体したことから生じた用法であると考えられるとしている。

その他 後悔（～おけばよかった） 中上級の複合的文型。「～ておく」の「期限内対策」を怠ったために生じたことに対する「～ばよかった」という「後悔」の念とが複合したもの

以上のように結論をまとめている。

第四章「～ておく」の全体構造及び意味構造について

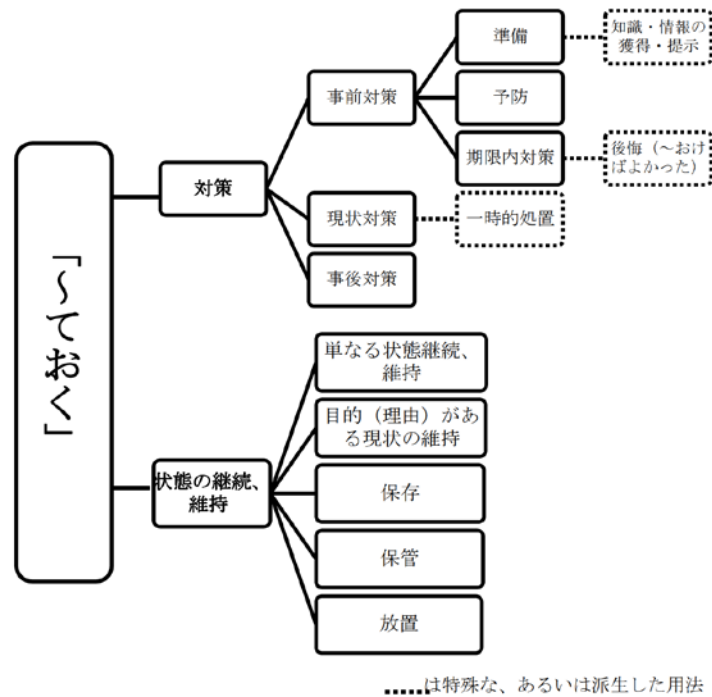
この章では、「～ておく」の個々の用法を分析し、全体構造及び意味構造について論じている。まず、第三章で示された12の用法を分析し、大きく①「対策」と②「状態の継続、維持」の二つに分けている。

さらに、「対策」に関しては、問題を解決するための対策とその時間関係によって、「事前対策」、「事後対策」、「現状対策」の三つに大きく分け、「事前対策」に関しては、将来の問題の解決の内容によって、さらに、「準備」、「予防」、「期限内対策」の三つに分けている。「準備」に関しては、その特殊な用法として、「知識・情報の獲得・提示」をその下に分類し、「期限内対策」に関しては、その下に、派生的な用法として、「～ておけばよかった」を配している。また、「現状対策」に関しては、派生的な用法として、「一時的処置」をその下に分類している。

「状態の継続、維持」に関しては、目的性の有無などの要素が加えることにより、「単なる状態の持続・維持」から、「目的（理由）がある現状の維持」、「保存」、「保管」、「放置」といった用法に分けている。

以上のことを図で示したものが、次の図である。

図1. 「～ておく」の全体構造

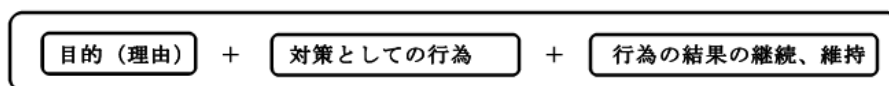


このように、「対策」と「状態の継続・維持」とに分け、「対策」を時間関係によって、「事前対策」、「事後対策」、「現状対策」の三つに大きく分け、階層的に「～ておく」の用法の全体構造を示したことは、前例がなく評価に値する。

次に、「～ておく」の意味構造について論じている。これは、「～ておく」の「準備」と「放置」など大きく乖離する用法を ①「目的（理由）」、②「その対策としての行為」、③「行為の結果の継続、維持」の三つの基本要素から説明している。これを基に、各基本要素が背景化、あるいは前景化することによって各意味用法が生ずると説明しているが、これもユニークな見方で、これについては日本語教育学会や東アジア日本語教育・日本文化研究学会などで既に発表している。

次に『『～ておく』の基本要素』の図を示しておく。

図2. 「～ておく」の基本要素



さらに、この「目的（理由）」、「その対策としての行為」、「行為の結果の継続、維持」の三つの基本要素から、各用法を詳細に分析し、次のような図に示している。説明は略す。

図3. 「準備」

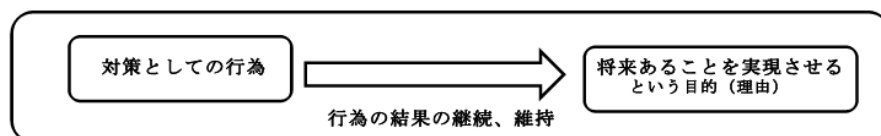


図 4. 「知識・情報の獲得・提示」

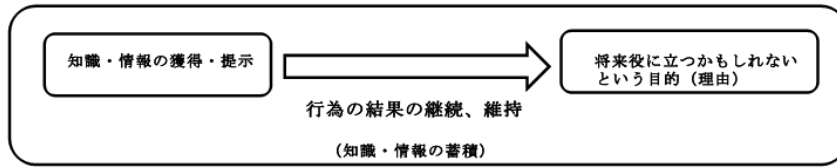


図 5. 「予防」

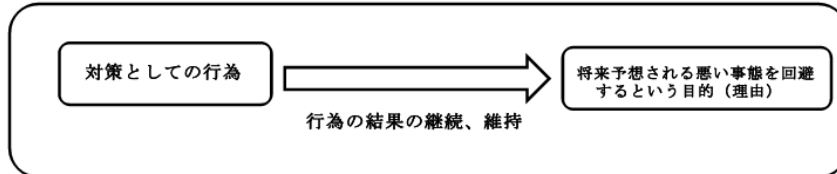


図 6. 「期限内対策」

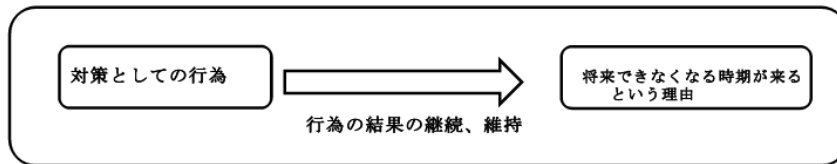


図 7. 「事後対策」

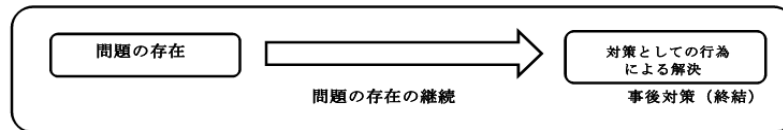


図 8. 「現状対策」

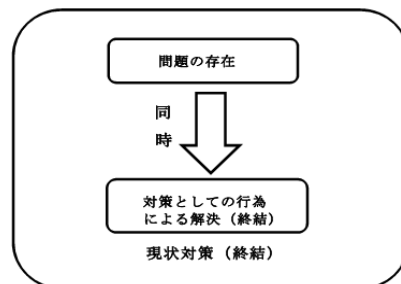


図 9. 「一時的処置」

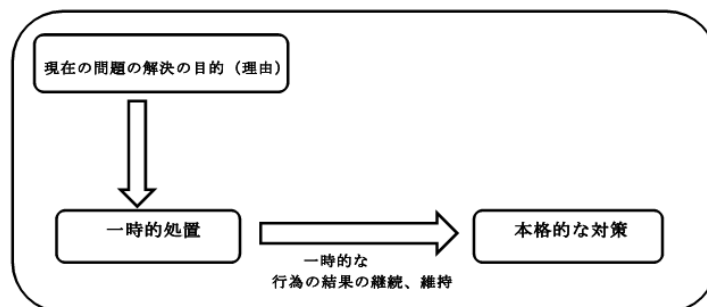


図 10. 「単なる状態の継続、維持」

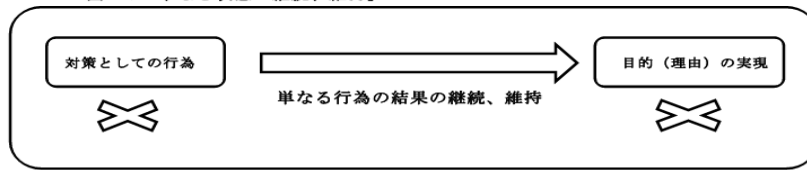


図 11. 「目的（理由）がある現状の維持」

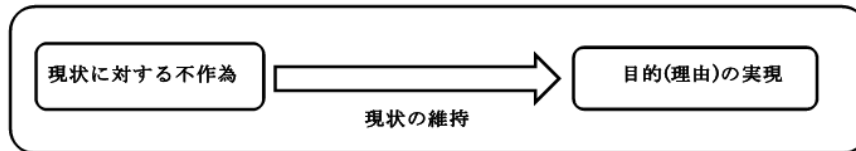


図 13. 「保管」

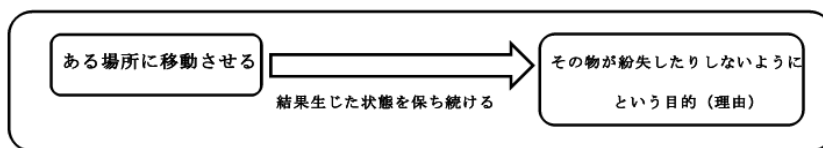
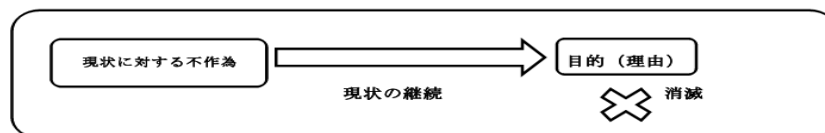


図 14. 「放置」



以上のように、各用法を「目的(理由)」、「その対策としての行為」、「行為の結果の継続、維持」の三つの基本要素から分析していった。その結果、この三つの基本要素がすべて揃っているものとそうでないものとがあることを示している。

これらの結果を踏まえ、各用法について基本要素の前景化と背景化という観点から詳細に説明し、異なる用法の関係を統一的に説明している。(説明は略す)

図 15. 「準備」の用法と基本要素の前景化と背景化の関係

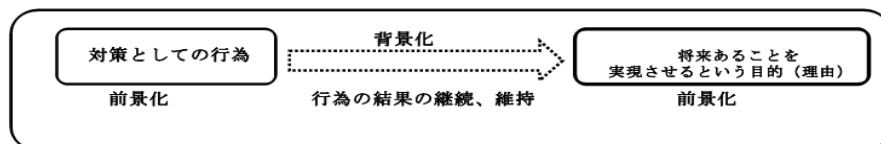


図 16. 「知識・情報の獲得・提示」の用法と基本要素の前景化と背景化の関係

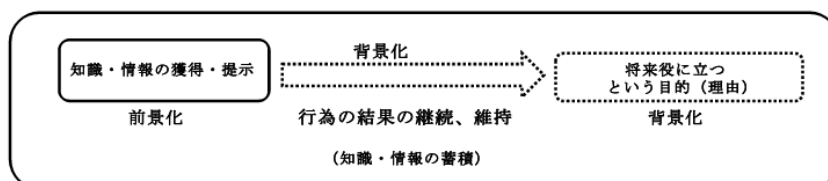


図 17. 「予防」の用法と基本要素の前景化と背景化の関係

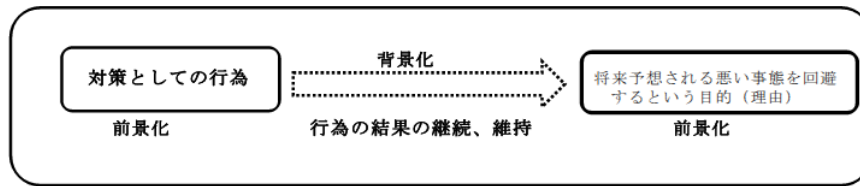


図 18. 「期限内対策」の用法と基本要素の前景化と背景化の関係

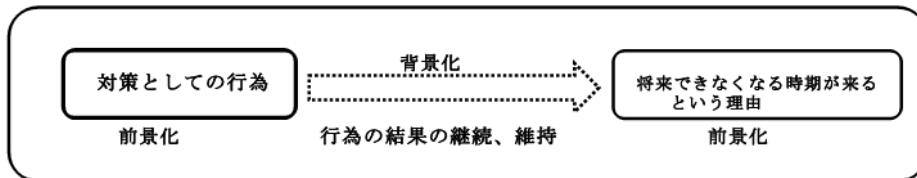


図 19. 「事後対策」の用法と基本要素の前景化と背景化の関係

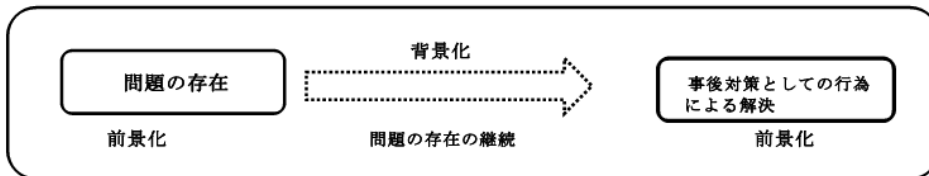


図 20. 「現状対策」の用法と基本要素の前景化と背景化の関係

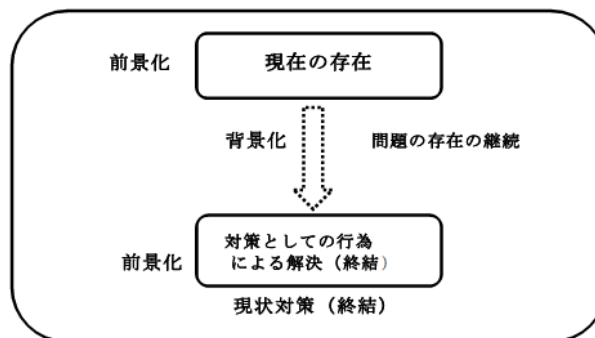


図 21. 「一時的処置」の用法と基本要素の前景化と背景化の関係

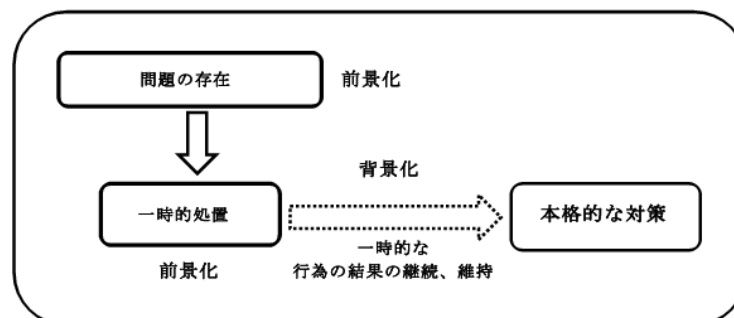


図 22. 「単なる状態の継続、維持」の用法と基本要素の前景化と背景化の関係

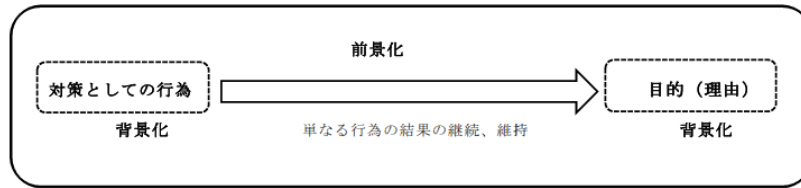


図 23. 「目的(理由)がある現状の維持」の用法と基本要素の前景化と背景化の関係

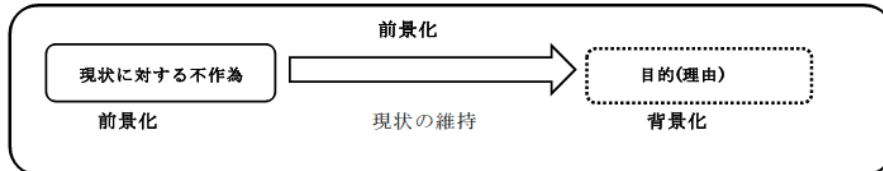


図 24. 「保存」の用法と基本要素の前景化と背景化の関係

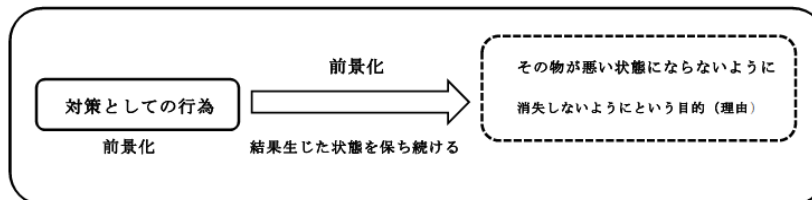


図 25. 「保管」の用法と基本要素の前景化と背景化の関係

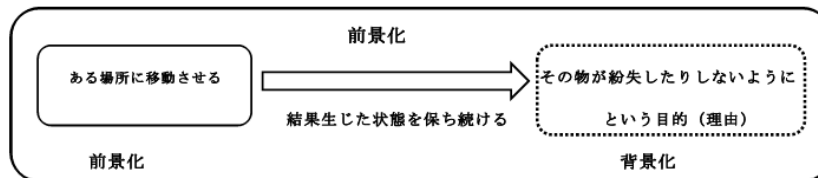
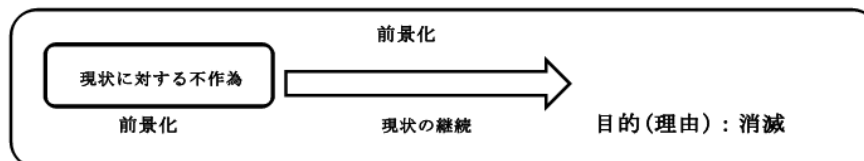


図 26. 「放置」の用法と基本要素の前景化と背景化の関係



第五章の「結論と将来の課題」では、各章の概要と結論を各章ごとに簡略に述べている。また、将来の課題では動詞の種類と「～ておく」の各用法との関係について研究を進め、さらに、その結果を踏まえ、教育の現場で実際にどのように「～ておく」を指導していくべきか具体的な指導法を考えていきたいと思うと述べている。

IV. 論文の総合評価

論文提出までの経緯

筆者は、2011年8月、韓国釜山外国語大学 韓国語学部を卒業後、翌2012年4月本学大学院言語教育研究科博士前期課程日本語教育学専攻に入学、2014年3月に修了、同年4月博士後期課程に入学、現在に至っている。修了に必要な単位10単位は既に取得済みであり、外国語検定試験にも合格している。論文提出時の業績は、中間発表会および『拓殖大学言語教育研究』、日本語教育学会、東アジア日本語教育・日本文化研究学会などの学会発表など計7本となる。博士論文完成発表会は、2016年12月17日に実施され、2017年1月28日の言語教育研究科委員会で論文受理が承認されている。博士論文は2017年5月16日に提出されている。審査委員による論文審査は、2017年12月9日拓殖大学大学院言語教育研究科論文審査基準に基づいて行われ、判定の結果、全員一致で合格であった。最終試験（口述試験）は、2018年1月13日に実施され、審議の結果「合格」と判定した。

1. 研究テーマの適切性・妥当性について

「～ておく」は、初級の重要な基本文型の一つであるが、日本語教育の現場ではごく簡単に「準備」、あるいは、「準備」、「放置」として扱われてきた。しかし、一見簡単に見えるその用法も、その実、極めて多くの用法を持つ難解な文型である。そのような文型に光を当て、その全体像を明らかにしようとしたことは、日本語教育に資するものであり、適切、且つ妥当であると思われる。

2. 先行研究、文献資料、調査などの情報収集の適切性・妥当性について

本研究を行うに当たり、ほぼ毎週国立国会図書館に通い、希少な資料を丹念に収集し、多くの書籍やコーパスを利用し、孫逸珊氏が作成した動詞一覧表に基づき用例集を作成したことは、適切、且つ妥当である。

3. 研究方法の適切性・妥当性について

調べられる限りの先行研究、文献資料の調査などを行い、多くの貴重な資料を自ら収集し、研究を進めたことは、適切、且つ妥当であると判断する。また、用例の分析に当たり、動詞一覧表に基づき、コーパス等を利用して動詞を網羅する形で用例集を作成し、それを基に丹念に研究を進めたことは、適切、且つ妥当であると考ええる。

4. 論旨の妥当性

日本語教育において重要な基礎文型である「～ておく」について、その用法と全体像を明らかにしようとしたことは、妥当であると判断する。

5. 以上の基準を満たしたうえで、全体の構成、言語表現が適正で、「論文」としての体裁が整っていること。

文字表記、形式の統一、参考文献などにやや不備が見られたが、これらは論文自体の内容や評価を損なうものではないため、公表までの間に修正することを求めた。また、第四章『「～ておく」の全体構造及び意味構造について』では、説明がやや簡略でわかりにくいので、公開まで、もし、修正が可能ならより詳しい説明に修正するように求めた。

6. 論文の内容が独創性を有し、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであり、また、将来高等教育機関で自立した教育者・研究者としてこの分野で活躍していく能力および学識が認められること。

日本語教育の初級で導入される重要な基本文型の一つである「～ておく」は、一見単純そうに思われるその印象から教育の現場では、「準備」とのみ教えられてきており、あまり深く考えられてこなかった文型である。最近よく使用されている教科書 16 冊を見ても、13 冊が「準備」という用法だけを挙げており、残りの 3 冊のみが「準備」と「放置」という二つの用法を提示している。ただ、この「準備」と「放置」という用法は、全くかけ離れており、この二つにどのような関連性があるのか、説明に窮することが多い。さらに、先行研究を見ていくと、実に多様で複雑な用法を持った文型であることがわかる。この一見単純そうに見える「～ておく」の複雑な用法を明らかにし、その全体構造を明らかにしようとしたことは、日本語教育に貢献するものであると言える。また、研究の過程で、「知識・情報の獲得・提示」、「予防」、「期限内対策」、「単なる状態の継続、維持」、「保存」、「保管」、後悔（～おけばよかった）の 7 用法は新たに加えられたもので評価に値する。特に、この中の「期限内対策」という用法は、従来の研究では「自己納得」、「心理的充足行為を表す場合」、「心理的準備」などと言われていたものであるが、今ひとつ納得がいかない説明であった。この「期限内対策」という用法は、「～ておく」の他の用法との関連、全体構造等から合理的に導き出されたもので、客観的で評価に値する。また、従来の研究では、個々の用例のみに焦点が当てられてきたが、用法の全体的な構造を明らかにし、さらに「～ておく」の用法に三つの基本要素を見だし、それらが前景化し、あるいは、背景化することによって、個々の意味用法が出てくるという説明も独創的なもので評価に値する。こ

の見解は、日本語教育学会や東アジア日本語教育・日本文化研究学会で既に発表している。

なお、本論文の巻末には、研究に使用された「～ておく」の用例の一部が 76 ページにわたり参考資料として付されているが、その用法の分類が付されていない。これは、分類が微妙で、曖昧なものがあるため、最終的に外されたものであるが、審査委員から分類があれば後進のために、また教育時に有用ではないかという意見があったので、検討をお願いした。

学位申請者は、生粋の中国人であるが、韓国語の習得を目指し、2007 年 9 月、韓国釜山外国語大学 韓国語学部に入學、2011 年 8 月同校を卒業。同大学に在学中に寮で同室であった日本人留学生から大きな影響を受け、翌 2012 年 4 月に本学大学院言語教育研究科 日本語言語教育専攻に入學した。2014 年 3 月博士前期課程を修了後、同年 4 月に後期課程言語教育学専攻に進學し現在に至っている。また、2015 年 7 月から 2016 年 12 月まで LILIAN 中国語学校で日本人に対し教え、好評を博している。また、2015 年から 2016 年にかけて TA として、本学学部生に対して直接法で中国語、韓国語の授業を行い、同様に好評を得ている。

このような点から当委員会は、徐梓競氏が今後、言語教育の場で実践的な教育者、研究者として大いに活躍するものと期待している。

審査委員会結論

以上述べたことから、本審査委員会は、慎重、且つ厳正な審査の結果、総合的に判断し、委員全員が一致して学位申請者に対し、「博士（言語教育学）」の学位を授与するに値するものと認めた。